

身装画像におけるモチーフの分析と絵引の研究

丸川雄三

国立民族学博物館 先端人類科学研究部

明治維新以降、約 80 年間の日本における身装（身体と装い）研究の一環として、当時の世相を反映した新聞挿絵や写真など、10,000 件にのぼる画像資料（身装画像）のデータベース化を進めている。本研究では、身装画像に表われている具体的な内容（モチーフ）と画像の対応付け手法を考案し、作業環境として分類支援システムを開発した。身装画像におけるモチーフの分析と、その先にある絵引の可能性について論じる。

A Motif Analysis for the Image Database of Clothes and Clothing Culture from 1868 to 1945 in Japan

Yuzo Marukawa

Department of Advanced Studies in Anthropology
National Museum of Ethnology

In the Image Database of Clothes and Clothing Culture from 1868 to 1945 in Japan, this study is to propose a mapping method of motifs and images as a motif analysis and to discuss the possibility that the motif analysis and the image index (Ebiki).

1. はじめに

明治維新以降、約 80 年間の日本における身装（身体と装い）研究の一環として、当時の世相を反映した新聞挿絵や写真など、10,000 件にのぼる画像資料（身装画像）のデータベース化を進めている[1]。身装画像には、当時の髪型や衣装、人物同士の関係性などが活写されており、その内容（モチーフ）に対応する「身装画像コード」が各画像にひもづいている。身装画像コードは概念体系に近いものであり、抽象化されたコードと具体的な名称を表わす幾つかのキーワードから構成されている。しかし身装画像コードは画像全体に付いているため、その名称を決定し、画像の該当する箇所を見つけるには、さらに専門的な知識が必要である。

本研究では、この問題を解決するために、身装画像に表われているモチーフの名称（モチーフ名）と、画像の該当箇所との対応付けを行うことを考え、その作業環境として分類支援システムを開発した。

2. 身装画像コードとモチーフの分析

身装画像データベースにおいて、画像にはそれぞれメタデータが付与されている。例えば新聞挿絵の場合は、掲載日や誌名などの出典、小説作家名や挿絵画家名などの客観的な情報が付与されており、加えて、研究者が独自に付けたコメントや身装画像コードが付けられている。

身装画像コードは、アルファベットと数字からなるコード体系であり、コードは先頭の大文字が大分類を、それ以下の文字列が小分類を示している。大分類のひとつ「W：アクセサリー」は 46

の小分類を持っており、例えば Wtu は「体を支えるため手に持ち地面に突くための棒状のもの」を指し示す概念コードである。この概念コードには、それぞれ複数のキーワードが関連付けられている。先に挙げた Wtu には、「杖」、「ステッキ」、「松葉杖」の、三つのキーワードが付与されている。

身装画像コードは画像全体に付けられているため、キーワードに対応するモチーフが画像のどこに存在するか、専門知識を持たない利用者が確認することは容易ではない。そこで本研究では、身装画像コードとそのキーワードを出発点として、画像とモチーフの対応付けを行う「モチーフ分析」を考案し、そのための作業環境として分類支援システムを開発した。

本研究におけるモチーフ分析手法は、(1)身装画像コードから画像を検索し選択する、(2)画像に表われるモチーフの名称（モチーフ名）を身装画像コードから抽出する、(3)モチーフ名と画像を対応付ける、の、3 つの段階から構成される。このような分析を行うことによって、身装画像とモチーフ名との対応付けが確認できるとともに、画像に関連付けられるキーワードの精度の向上も期待できる。

3. 身装画像分類支援システムの開発

モチーフ分析を行う環境として、身装画像コードと画像とを対応づけるための分類支援システムを開発した。身装画像 10,000 件に対して、提案手法に沿った作業を行うことができるインタフェースである。

トップページには身装画像コードが掲載され

ており、大分類およびそれに対応する小分類の一覧から画像を検索し閲覧することができる。

図1は検索結果一覧から、身装画像を実際に選択し表示した様子を示したものである。画面の右側に、この画像に関連付けられた身装画像コード由来のキーワードが並んでおり、キーワードをマウスでドラッグすることによって、画像の上に直接キーワードを配置することができる。

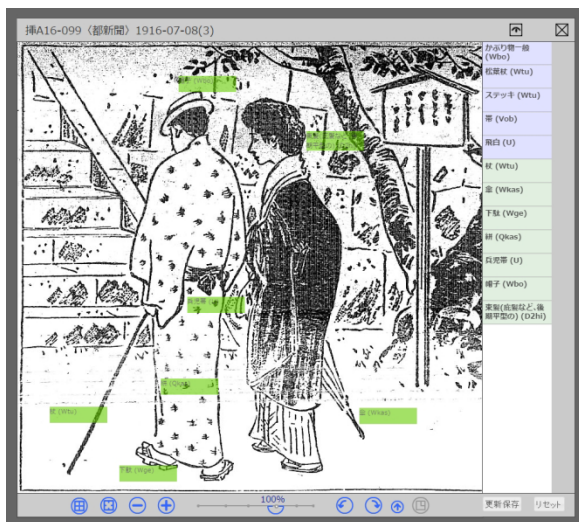


図1. 詳細表示例(「浮雲(43)」都新聞、1916(大正5)年7月8日号3面、井川洗厩筆)

なおキーワードの配置は自由であるため、モチーフとの位置関係について、作業時にある程度の基準の統一が必要である。またキーワードの中には抽象的なものや画面全体に関係するものもある。このような種類のキーワードについても、やはり配置する場所に基準を設ける必要があると思われる。

4. モチーフから「絵引」へ

民俗学者でもある渋沢敬三は、「字引ならぬ絵引をつくれぬだろうか」と考え、『絵巻物による日本常民生活絵引』を編纂した[2]。絵巻から日常生活の場面を抜き出し、そこに表われるものに名称をつけて言葉から引けるようにした図解辞典(絵引)である。

2009年、渋沢栄一記念財団実業史研究センターと国立情報学研究所連想情報学研究開発センターは、「実業史錦絵絵引「衣喰住之内家職幼絵解之図」」を共同で制作し、ウェブ上に一般公開した[3]。明治初期に子供向けの教材として描かれた錦絵「衣喰住之内家職幼絵解之図」は、一軒の民家が出来るまでを絵入りで説明するものであり、設計から製材、棟上げ、内装工事に至るまでが懇切に取り上げられている。このウェブサイトでは、錦絵に登場する人物や道具500点の名称

と図像を「絵引データベース」および「絵引ギャラリー」として発信している[4]。

身装画像分類支援システムによって、画像とモチーフ名の対応付け(モチーフ分析)が可能となった。さらにそこからモチーフ名を索引とした「絵引」を作ることも可能である。そのためには画像の該当部分を身装画像から抜き出す必要があるが、この「実業史錦絵絵引」は他のコンテンツにも適用可能な汎用性のある「絵引システム」として構築されているため、身装画像における絵引化の作業にも活用できると思われる。

5. おわりに

身装画像データベースの活用研究として、モチーフ分析手法を考案し、そのための作業環境として分類支援システムを構築した。さらにモチーフ分析結果を用いた「絵引」の可能性を示した。

図像資料を活用したモチーフの分析は、ひとつの研究分野にとどまらず、広く一般向けの図解辞典すなわち「身装絵引」の実現へと、その可能性を広げるものである。身装画像データベースの活用研究として、今後もモチーフ分析と絵引の構築に取り組みたい。

6. 謝辞

本研究は、「JSPS 科研費基盤 B 課題番号 24300099 (平成24年度~平成26年度)「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築—文化変容に視点を据えて」(代表:高橋晴子)」の助成を受けたものである。本研究の関係者の方々にお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 丸川雄三: 身装画像データベース「近代日本の身装文化」の構築, じんもんこん 2013 論文集, Vol.2013, No.4, pp.233-238 (2013).
- 2) 澁澤敬三, 神奈川大学日本常民文化研究所編: 『絵巻物による日本常民生活絵引』新版, 平凡社 (1984).
- 3) 渋沢栄一記念財団「実業史錦絵絵引「衣喰住之内家職幼絵解之図」」, <http://ebiki.jp/> (参照 2015-01-06).
- 4) Latz G. (Eds.): Rediscovering Shibusawa Eiichi in the 21st Century, Marukawa Y.: Involvement with the Business History Image Index Project, pp.226-228., Shibusawa Eiichi Memorial Foundation (2014).